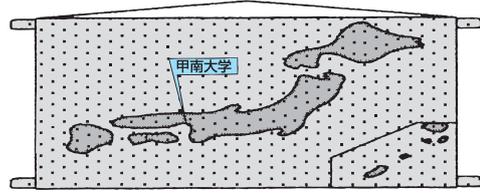


Zephyr

〈第76号〉

ゼフィール・にしかぜ



<https://www.konan-u.ac.jp/kilc>

《特集＊オンライン授業への取り組み—今だからこそできる学習法》

★所長からのメッセージ：国際言語文化センターのオンライン授業への取り組み

～これからの外国語教育を見据えて～	藤原三枝子	2
〔英語〕 Pandemics and the Academic	Marian WANG	3
〔ドイツ語〕 Web 授業とドイツ語学習～今だからこそできる言語学習～	野村 幸宏	4
〔フランス語〕 コロナウイルスの危機に負けないフランス語教育	ディディエ・シッシュ	5
〔中国語〕 今回はバーチャル中国旅行へ	石井 康一	6
〔韓国語〕 韓国語ネット授業の断想	金 泰虎	7
〔日本語〕 最近の ICT (情報通信技術) 学習機器と大学教育	谷守 正寛	8

甲南学園創設者

平生鈞三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語＋1 (第2外国語)」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙 (年3回刊行)

Necessity Is the Mother of Invention

国際言語文化センター教授 Thomas MACH

Welcome to our special Zephyr issue focusing on online language education. Maybe you can guess why we have chosen this topic at this time? Indeed, it is because of the coronavirus pandemic. This crisis is affecting every aspect of our society, of course including education. It is often said that “crisis” and “opportunity” are closely related. This is because a crisis usually pushes people to reconsider how they typically do things, and to think of new ways of getting them done. Often the push feels uncomfortable, and we quickly return to the old ways when the crisis ends. But now and then, we realize that some of the new ways we discover during a crisis are actually quite useful, and we decide that they are worth keeping. In this sense, while a crisis like this coronavirus pandemic can feel sudden and unwelcome and scary, it can also become an opportunity to discover improved ways of doing certain things.

For us at Konan’s *Genbun* Center, we are trying to discover new ways of improving the language and culture education we provide by fully exploring the opportunities that online tools offer. The articles included in this issue of *Zephyr* report on some of our early trials and results, but our efforts are ongoing.

The English proverb “*necessity is the mother of invention*” is closely related to the idea that a crisis presents opportunity. (The Japanese version of it is typically translated as 必要は発明の母.) This proverb means that having a new need causes us to creatively invent new things. During this pandemic we need to teach and learn online more than we ever have before, so please read these pages to find out more about our inventive ways of doing so.

国際言語文化センターのオンライン授業への取り組み ～これからの外国語教育を見据えて～

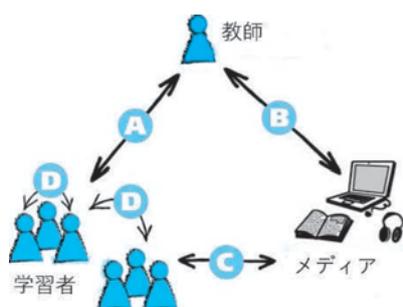
国際言語文化センター所長 藤原 三枝子

まさか甲南大学のすべての授業がオンラインになるとは！国際言語文化センターの外国語科目は30人以下の小人数クラスがほとんどであるため、4月始めの段階では、教室で行う授業で学生の皆さんとお会いできると期待していました。ところが実際は4月20日から一斉にWeb授業となり、face to faceを基本とする外国語の授業もすべてオンラインで対応することを余儀なくされました。ペアワークやグループワークを取り入れてコミュニケーションを楽しく学ぶ授業、異文化との出会いの喜びを伝える授業の可能性を模索しながらWeb授業が始まりました。

学生のみなさんのインターネット環境や使用するデバイスにも配慮するために、英語・ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語・日本語の6言語の授業を提供する国際言語文化センターでは、まずは原則「オンデマンド型」で授業が始まりました。そのオンデマンド型の授業でも、実施方法は多様です。甲南大学のLMSであるMyKONANの「授業資料」に、アップロードした資料をもとに学習し課題を提出するもの、PPTにナレーションを入れたmp4のビデオファイルを大学が準備したポータルサイトにアップロードし、それをダウンロードして学習するもの、さらに、教員が使用教科書に基づいて作成したコンテンツをそのホームページで学習することができるもの、あるいはそれらの複数の方法を併用している授業もあります。そこには、きっと、皆さんが言語のスキルを学ぶための内容とともに、インターネットを通じて、その国や地域の生の文化に触れその楽しさを味わうことができる情報もあるでしょう。

家に居続ける時間が長い今、普段はあまり触れることがない各国の在日大使館や文化機関のホームページを訪れて、バーチャルで様々な異文化との出会いを楽しんでください。第2外国語に関していえば、ドイツ大使館のサイトからYoung German Japanへアクセスするとそこには若者にとって身近な話題や文化情報が満載です。フランス大使館のサイトからは、例えばフランスの各放送局にアクセスし、生のフランス文化に触れることができます。中国の大使館のサイトの「中国紹介」では、現代芸術や歴史、観光に関する文化関連情報も豊富な写真とともに提供されています。同様に、韓国大使館のサイトから「文化news」にアクセスすると、駐日韓国文化院のサイトにつながり日本における韓国関連のイベント情報を得ることができます。こうして公式ホームページを入口として皆さんの関心のあるテーマについて、次々と生の情報にアクセスすることが可能です。

下のイラストは授業を構成する人とメディアとのインターアクションを大枠で示したものです。オンデマンド型授業では(B)と(C)が中心となりますが、皆さんが提出された課題に私たち教師がフィードバックすることなどにより教師と学習者のつながり(A)の活性化にも努めています。この(A)のインターアクションをさらに促し、学習者間のつながり(D)を授業に取り込むために、TeamsやZoomなどのWeb会議システムを使った「リアルタイム型」も、現在はかなり取り入れられています。例えばZoomで学習者間のインターアクションを可能にするブレイクアウトセッションをすでに授業で体験された方も少なくないでしょう。「チャット」や「反応」の機能は、教師と個々の学習者のつながりを支援する有用な機能といえます。こうした利点から、オンデマンドの個別学習とリアルタイムでの双方向的授業を融合した「ハイブリッド型」で行う授業も少なくありません。



*Funk et al. (2014):48 に日本語訳を補足

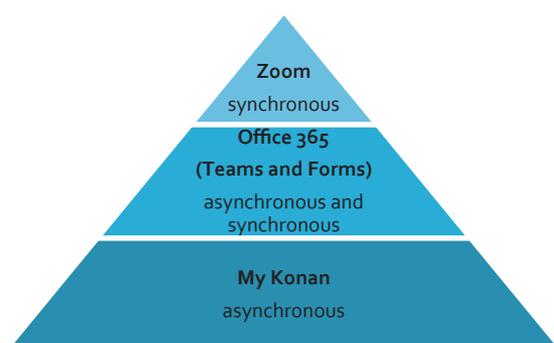
新型コロナウイルス感染症が収束した後の外国語教育は、従来の対面型の授業にオンライン授業の利点を組み合わせた新しいハイブリッド型の授業が促進されると思われます。国際言語文化センターは、昨年7月に「スマホ・AIの活用による外国語教育」をテーマに言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会を開催し、これからの外国語教育の新しい方向性を話し合いました。センターはこれからも、外国語教育の一步先を見据えて皆さんの外国語と文化の学びを支援していきます。

*Funk, H. et al. (2014) *Aufgaben, Übungen, Interaktion (Deutsch Lehren Lernen 4)*, Langenscheidt

Pandemics and the Academic

国際言語文化センター准教授 **Marian WANG**

My overseas teaching experience began in Taiwan in June 2003. Severe Acute Respiratory Syndrome (SARS) was recognized in February 2003 when I had to make the decision of teaching in Taiwan where SARS was spreading. Fortunately, I went to Taiwan just about the time SARS fizzled out. Fast forward 17 years. Ever since January 2020, I have had my life turned upside down. Unfortunately, the coronavirus (COVID-19) outbreak isn't fizzling out, which means that I must now teach online despite my poor technology skills. So, how should I adapt my teaching during this pandemic? I realized that I needed to become more familiar with various online teaching tools.



My Konan, Konan University's learning management system was my base for contacting students and uploading documents. Konan University students are expected to check My Konan regularly. The disadvantage of My Konan was that it was not smartphone friendly and thus unpopular among students.

Next, I used Office 365. I set up a Team for all of my classes, invited students as members, and scheduled our first online meeting. More useful

than the meeting function was the posting of messages. Students were adept at posting and commenting on their classmates' postings or videos. The postings fostered a friendly and interactive atmosphere in the online classroom. Forms in Office 365 (now Microsoft 365) was the most effective tool for assigning homework and keeping track of homework submitted.

Finally, Zoom was the most useful tool for having students work together on improving various skills. Listening skills were practiced by showing videos or playing the textbook listening material. Speaking was done in breakout sessions where students asked questions and participated in discussions on what they had read for homework. Finally, Zoom's chat was practical when I asked questions to the class, gave instructions, or did games.

The asynchronous and synchronous tools have encouraged me to use them after I return to the traditional classroom and/or remain in the virtual classroom. This virtual journey has not been in vain for me, but how about for my students? Some students indicated that they preferred online learning because they did not have to commute and could manage their own schedule. Students reported that the main inconveniences of online learning were poor internet connection, being unable to ask questions, and having more homework. All of the students agreed that online learning was helpful for their future as they became more accustomed to using computers.

The academic during this pandemic realizes that COVID-19 is a test for us to become better educators and researchers when online teaching is our only choice. My students are my copilots on this virtual journey; we are moving into uncharted territory, while ensuring that interactive and relevant learning can take place, even in the virtual classroom.

Web 授業とドイツ語学習

～今だからこそできる言語学習～

国際言語文化センター准教授 野村 幸宏

2020年度前期の授業は、2週間遅れて4月20日に開始されました。コロナウイルス感染の拡大から、大学キャンパスへの立ち入りが制限される中、Webを活用した授業という形で学期が始まったのはご存じのとおりです。学生の皆さん、特に1年生の皆さんは、学生同士の横のつながりが感じにくい中、学習面での苦勞と何よりWeb授業への不安が大きかったのではないのでしょうか。実は私たち教員の大多数にとっても、こうした授業形態はほぼ初めての体験で、戸惑いと不安の中でスタートしました。ドイツ語は英語と親戚関係にあり、多くの類似点はあるものの、ほとんどの学生さんにとっては大学で初めて触れる言語です。初習、あるいはまだ習い始めて日が浅い外国語を、オンラインでいかにして学習できるのか、特にドイツ語によるコミュニケーション能力をつけるという授業の目標を、オンラインでいかにして達成できるのかという疑問で、私たち教員も大いに頭を悩ませました。

そんな中、学生の皆さんが授業についてきてくれる、課題をちゃんと提出してくれる、授業内容に質問をしてくれるなど、前向きな姿勢に勇気づけられながらの授業運営でした。この機会に、皆さんの学習姿勢にお礼を言いたいと思います。本当にありがとう。

前置きが長くなりましたが、本題の「今だからできるドイツ語学習」についてです。外出が制限される中で、皆さん、自宅にいる時間が長い学期だったと思います。時折「退屈だな…」と感じることもあったのではないのでしょうか。そんな時間を是非、学習に活かしたいところなのですが、何をすればよいのかが分からない、Web授業で疲れているところにさらに勉強という気にはなれない、ということはありませんでしたか？

その時間をうまく自分の趣味と絡めながら、自宅で過ごす長い時間をドイツ語学習に使ったという学生さんの例を紹介してみたいと思います。この学生さんは、普段からアニメを見たり、アニメソングを聞くことがよくあったそうなのですが、Web授業でほぼ常に電源が入っているPCとスマホを使って、空いている時間に好きなアニメをYouTubeやNetflixを使ってドイツ語版で見てみよう、お気に入りのアニメソングのドイツ語翻訳版が存在するのかネットで探してみようと思いつき、実践してみたそうです。それを見つけたこの学生さんは、興味津々でその作品を見たり聞いたりしているうちに、お気に入りのセリフやフレーズをドイツ語でまねてみる、そしてさらにその表現やイントネーションまで覚えていくようになったそうです。表現やイントネーションをコピーするためには、何度もそれを繰り返し口にしたり、その登場人物の気持ちになってみたりと、いろいろな方法で「練習」したことでしょう。

この例の特徴は、「学習者が学習しているという意識なしに学習している」、あるいはもっと単純に「単に楽しいから、自分の楽しみのためにやっている」ということだと思います。楽しいからこそ自分でやり方を工夫し、何とか自分の思う形に近づけようと試行錯誤をする、という「学習」ですね。別にそれをやることで、成績をよくしよう、将来につなげようという動機ではなく、興味があるから、ただ単に面白いからやる、という「学習」です。その学習の結果として、「少し話すスピードが上がったような気がする」、「語彙が増えている気がする」、「以前よりイントネーションがドイツ語っぽくなっている」ということが、他の学生にもわかるぐらいの変化がありました。

家にいる時間が長くなり、少し時間を持て余すようなときには、この例のように、「興味がある分野で何か探してみよう」という好奇心に任せた「学習」をしてみてもいいでしょうか？この学生さんは、聞いてまねる、という形でしたが、それが例えば何かを読むだけでもいいですし、サッカーが好きな人はドイツ語のサッカー実況を聞いてみる、コピーしてみる、というのでもいいかもしれません。猫をこよなく愛するならば、ドイツの猫好き掲示板を探して「猫マニア」の書き込みを読んだり、それに勇気を出してコメントをつけてみたりするのもよいでしょう。また、直接ドイツ語とは関係がなくても、ドイツ語圏の様子を写真で詳しく見るだけでも、何か発見があると思います。日々の生活と授業や課題に追われ、目の前のことをこなすだけで手いっぱい、という時はなかなか難しいのですが、時間があるときには、自分の趣味や関心と外国語を絡めて「遊んでみる」、「はまってみる」と、様々な発見があり、大学での学習にも意図していなかった成果が出てきたりするものです。

コロナウイルスの危機に負けないフランス語教育

国際言語文化センター教授 ディディエ・シッシュー

新型コロナウイルスのため、「テレワーク」(télétravail) という新しい働き方が誕生しました。大学でも「オンライン授業」が発展してきました。甲南大学はこの方針を取っていますが、効果的にオンライン教育を利用するために、どうすればいいのかということについて考えましょう。

国際言語文化センターのサイトの「学習」と「教科書」をクリックしたら、「Nouveau Zéphyr」の文法の練習をすることができます。「オーラルコミュニケーション」を高めるため、「Le Français à la carte」の音声は非常に便利です。「Phonétique」の項目を聞いて、発音の練習を利用することもできます。外国語教育は「読む、書く、聞く、話す」という四つの能力を高めようとしていますが、スマートフォンかコンピューターを利用すれば、とりあえず、読解と作文を優先しなければなりません。

ただ、外国語を学ぶことは、文法や語彙を覚えることだけではありません。異文化の発見もとても大切なことです。フランス文化を知るためには、インターネットを利用すれば、教室外でも学習の機会を増やすことが可能です。

インターネット上で、様々なフランス語のHPを発見することで、文化に触れ、実際の風景などを見ながら、想像や視野を広げることもできるでしょう。

RFI (Radio France Internationale: フランス国営ラジオの国際放送) のHP上で、Langue française (フランス語) をクリックすれば、学習に役立つ番組を利用することができます。(http://www.rfi.fr/lffr/statiques/accueil_apprendre.asp)。



空から見たフランス

Journal en français facile 「易しいフランス語で聴くニュース」(<https://savoirs.rfi.fr/fr/apprendre-enseigner/langue-francaise/journal-en-francais-facile>) という番組はとても貴重なツールになります。ニュースを聴きながら、同時に画面上で文書も読めるので、理解できずに途方にくれる恐れがありません。また、Les mots de l'actualité (時事問題の言葉) という番組では、ニュースでよく使われる単語と表現を説明しています。Exercices d'écoute (ヒアリング演習) という番組では、ニュースの理解度をチェックするための簡単な質問も用意されています。

テレビ番組なら、TV5 Monde (<https://japon.tv5monde.com>) というチャンネルもあります。映画、ニュース、ファッションや料理についての番組もあり、フランスの「日常の文化」(culture du quotidien) に触れることができます。

フランス文化の発見のため、映画もとても貴重なことです。AlloCiné (<http://www.allocine.fr/>) というサイトで、フランスで上映される映画が紹介されています。毎週の水曜日に新しい映画がでます。勿論、すべてのタイトルと説明はフランス語で書いてありますが、フランス語の能力が高なくても、通じることが少なくありません。おまけに、日本の映画がありますので、予告編を聞きながら、フランスの字幕と比べることができます。

新型コロナウイルスの危機は世界中でまだ続いています。「閉じこもる」という姿勢は解決になりません。まだフランスへ行けませんが、交流の再開を待ちながら、異文化のリテラシーを発展させましょう。今の危機は、再出発のきっかけとなります。



Paris : le pont des Arts (芸術橋)

今回はバーチャル中国旅行へ……

国際言語文化センター准教授 石井 康 一

◎岡本キャンパスの中庭の見事な桜も、今年は寂しかったことでしょうか。主役の学生の姿が見えない静かなキャンパス。ちょうど40年前に大学生になった私は、今年の一つの大きな区切りと考えて新入生に向かい合おうとしたとたんの状況急変……そのあとはただ必死で新しい方式の授業の道を走ってきました。普段の授業からのマイナスはできるだけ少ないように、部分的には普段よりプラスになる要素もあるように。現在はオンデマンド授業に zoom での個別の発音指導の併用で進めています。後期はどうなるのか、来年度はどうなるのか不安もありますが、教室であれ自宅であれ楽しい学びの場を、責任を持って創り出していきたいです。

●学生の皆さんはどのように過ごしていますか。大学に行けない、バイトにも行けないマイナスの時間で、大学生としての思索を深めることはできたでしょうか。どこへ行っても中国語が耳に飛び込んでくる状況は大きく変わりましたが、中国語を学ぶ意味や必要性がなくなったわけではありません。今しかできない学びをいくつか提案します。浮いた通学時間を使って、自主的な学びを深めていって下さい。

○中国の YouTube といえる 优酷 <https://www.youku.com/> で中国の食の源流をたどる大ヒットドキュメンタリー「舌尖上的中国」(舌の上の中国)を検索したら、「舌尖上的高校」(舌の上の高等学校)が出てきました。中国語の「高校」とは高等教育を行なう学校すなわち大学のことで、キャンパスの食堂探訪なのです。キャンパス周辺の一般の店も対象に、ほめるだけでなく苦言もあり、パロディ精神もあり面白いです。私のおすすめは第15期、16期です。状況が落ち着いたら皆さんも甲南大学バージョンを中国語で発信してみたいはいかがでしょうか。「舌尖上的中国」の方ももちろんおすすめです。豊かになることで伝統的食文化を再評価するのは、「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されたのと通じるころがあります。「舌尖上的重慶」など、地方版もたくさんあります。「食」とともに、お茶も大切な中国文化ですね。「茶馆营业中」(茶館営業中)は1回15分で全12回、中国茶の奥深さを学べて、リスニングのトレーニングにもなります。



◎中国へ——今はとりあえず、ドキュメンタリー「最美中国」で行先を探しましょう。第1季から4季まで計54本、字幕は中国語と英語が同時表示でわかりやすいです。チケットサイト「大麦」<https://www.damai.cn/> で見に行きたいステージがあれば日にちを決めて、飛行機とホテルは Trip.com (<https://jp.trip.com/?locale=ja-JP>) で調べましょう。あくまでも仮想ですが、いつかは本当に行けたらいいですね。

○中国語を学んでいる皆さんには、ぜひ中国のいい映像作品に触れてほしいと思います。ことばを知り、人を知り、土地を知り、歴史や文化を知れば、格差問題、環境問題を抱えながら改革開放の40年で経済発展を果たした中国文明の本質に迫ることができるでしょう。後期に向けて、今できる学びで前進、前進していきましょう！

●おすすめの本：

上田紀行 編著『新・大学でなにを学ぶか』岩波ジュニア新書 2020

小島俊明『一人で、考える——哲学する習慣を』岩波ジュニア新書 2019

飯島渉『感染症の中国史 公衆衛生と東アジア』岩波新書 2009

吉村澄代 編『奥深く知る中国——天安門事件から人々の暮らしまで』かもがわ出版 2019

◎資料

茶馆营业中

https://v.youku.com/v_show/id_XNDcwNTMzNzIxNg==.html?spm=a2h0c.8166622.PhoneSokuProgram_1.dtitle
最美中国

https://v.youku.com/v_show/id_XMTcxNDcwODIyMA==.html?spm=a2h0c.8166622.PhoneSokuProgram_1.dtitle

韓国語ネット授業の断想

国際言語文化センター教授 金 泰 虎

古来よりの教育は、教育をする側の人と学習をする側の人と面と向かい、あるいは空間をともにして行われるという認識が強いです。しかし、通信技術の発達で導入され出したネット授業は、伝統的教育の方法論が対面や同じ空間ではない環境であっても成り立つようになってきました。

教育における対面と同じ空間という考え方の意味は、教育はただ単純に知識だけを伝えることではない、ということであると考えます。とりわけ韓国での学校教育は知識だけではなく人格形成とも絡ませて考えている傾向があり、その意味で対面授業は諸外国より重視されていると言えます。

目下、コロナウィルス感染防止対策によって学校教育における対面授業が行われなくなり、この想定外の事態を乗り切るため、通信技術を活用したネット授業を実施することで学習者に知識だけは伝えられることになっています。学校教育の難局を乗り越える切り札は通信技術を活用するネット授業ですが、対面授業に越したことはありません。

韓国語教育のネット授業には難題が多く、とりわけハングルという固有の文字を使うため、西洋言語のアルファベットのような簡単な入力はできません。韓国語のネット授業における学習者の書く能力の養成や会話の練習は対面授業には勝りません。

東洋における教育論は『孟子』に記されている「得天下英才、而教育之」から垣間見ることができます。すなわち、「天下の英才を得て之を教育す」であります。人に対して教えて育てるということは、学習者に一方的に施すという意味合いが強いと言えます。ある意味で、現在も東洋の教育では根強く残っている考え方だと思います。

一方、西洋の「Education」は東洋とは異なると思います。つまりラテン語の語源をもつ Education における「e(ex)」は「外へ」、そして「ducare」は「引き出す」の意味です。両者を合わせた「educare」は「外へ引き出す」、言い換えれば Education は学習者の「潜在性や可能性を外へ引き出し発揮させる」ということになります。つまり、学習者には東洋的に施して育てるのではなく、個人の埋もれている可能性を発掘するということです。

ところで、ネット授業は対面授業では受け身になりがちな学習者が学習集団に埋もれることなく一人で取り組むようになります。これは学習能力をより積極的に導き出しつつ、対面授業では積極的に取り組んでいないような学習者に多くのことを考えさせる西洋的教育の側面があると言えます。

言及してきたように、東洋と西洋とでは教育に関する基本的方向性と考え方が違うのです。しかし、最近では日本の教育現場でも東洋的方向性や考え方からの転換を目指しています。学習者参加型の授業、フィードバック、アクティブラーニングなどが叫ばれており、双方向性を目指したり、学習者の理解度を確かめたりする方向に動いています。

しかし、東洋と西洋の間で教育に関する基本的な方法論と考え方は違っても、最終的に東洋と西洋を問わず、教育を受けた人間に求められることは同じであると思います。人類のため、国家のため、社会のため、家族のため、自分自身のため、教育による才能や素質を発揮させることを望むからです。

要するに、ネット授業よりは対面授業に越したことはありませんが、ネット授業が非常時の教育を補って支える有意義なツールであることは間違いありません。対面授業では積極的ではない学習者の能力を導き出し、またグローバル時代には欠かせない通信技術を熟知させ、逆に教員も新しい通信技術とネット授業に備えた新たな教授法を身につけることができるというポジティブな考え方は、対面授業が実施できない難局を乗り越えていく力になると考えます。

最近の ICT（情報通信技術）学習機器と大学教育

国際言語文化センター准教授 谷 守 正 寛

本号テーマ「オンライン授業～今だからこそできる学習法」では学習法と言う以上学習者視点からのそれになりますが、タッチ操作に慣れた最近の学生なら IT 技能が教員のそれを越えようし、古びた機材でいくら学習法を創意工夫しても進化した ICT を駆使した機器の優位な性能を越えることは無理であり、ICT 事情を熟知した上でなければ効果的と思う学習法を述べても井の中の蛙的な話に終わります。筆者の立場からは言語学習の工夫を語ることにになりますが今更的な話は控え、門外漢ながら最新の ICT 機材について若干の観察と受売りのな情報を通して一般的なエッセイでここはお茶を濁したく思います。

大学生の ICT 依存の学習論以前に小中生の機材を知ることは無駄ではないでしょう。固有名になりますが JustSystem 社（筆者自身もヘビーユーザー）のスマイルゼミというシステムでは専用タブレットに常時 WiFi を通してデータがアクセスされ学習プロセスも整理・管理されるように機能がカスタマイズされており、この点ですでに一般的な教育サービスウェブサイトより利便性が卓越しており、どう足掻いても学習法の工夫で太刀打ちできるレベルを超えています。学習内容が定期的にダウンロードされ、それから自由に取捨選択したり学習ミッションが自動で与えられたり、自在の速さで繰り返し学習も自在、タッチペンによる記入式回答も可能、間違っても心理的負担なく再確認しながら学習効果が強化でき、ヒントも得点も自動化され成果に応じてインセンティブが付与されて意欲を維持させつつ、英語学習では小1生からネイティブの発音とアニメのマッチングから無理なく導入し、描画ツールによるデザイン学習も有り、ポートフォリオは自動化され保護者への通知も自動化されている等、ここ数年で飛躍的に進化しています。これは学校向けにも開発されています。

高校生向けにはベネッセ等が進める *classi* という学校向けのシステムがあり、それによると学習記録とポートフォリオが一目で確認でき、資料共有可能、自動作成される成績カルテが確認でき、探究学習までもサポート、グループ内でいつでもどこでも質問が投稿可能で生徒同士がオンラインで学び合え、意見がリアルタイムで集計可能、教師・保護者間コミュニケーションツールにも活用でき、豊富に用意された学習動画から生徒の特性に合わせて自動で案内される等アクティブ・ラーニングは無論のこと今後は、各学習者毎の学習進度に対応した学習レベルと内容の調整が自動化されて提供される ICT によるアダプティブラーニング (Adaptive Learning) の段階へと教育もパラダイムシフトするのでしょうか。かの Z 会でも徹底した AL に特化した個人向けタブレットを用意しています。こうした ICT 学習機器を使うと学習過程が徹底的に効率化され学習速度は圧倒的に速まるのは確かです。

では大学教育においてはどうか。学校教育で期待される既定の学習内容であれば大手の会社が上記のようなシステムを構築することが可能ですが、専門性の高い各教員が提供したい授業内容は独自性が高く汎用的な学習データベースは構築不能でしょうし、そうした教員がそれぞれの知識と技能を徹底的に効率化させた学習プロセスをオンライン授業で展開するためにデータバンクを事前に用意するには膨大な労力と時間を要します。筆者の場合は日本語教育ですが、上級レベルの日本語学習になると、関心のある先行研究や自身の研究を元に、いわゆる語学学習ではなく言語の演習的セッションを行いつつ言語能力を高めるのが大学ならではの教育と意識しており、従って例えば日本語能力試験のための受験学習といった授業は専門学校等に任せるか正に上述のようなシステムがカバーすべきと考えます。ZOOM はプロジェクター代わりに過ぎず、My Konan は情報交換・保管ツールであっていずれも AI による AL デバイスにはなり得ません。単なるオンライン授業は専門性の高い学習では対面セッションには当面は劣ると考えるので、生憎今こそと言えるような学習法が思いもつかないのが正直なところなのです。但し大学の専門教育向けの汎用的な ICT 教育システムは *classi* 等の応用で可能であろうし、その構築を今後期待したいところです。